

# 10. イスラム世界の市場経済

## 1. 市場経済を支えた制度

法・貨幣・都市

## 2. イブン・ハルドゥーンのエconomic論

# 1. 市場経済を支えた制度 法・貨幣・都市

## (1) 法: イスラム法とイスラム法体系

イスラム法(シャリーア): 聖法としてのシャリーア = 普遍法 としてのイスラム法

原義: 「水場へ至る道」

啓示法: 啓示(コーラン: 神の言葉)をもとに演繹的に体系化された規範群

①イバーダート ②ムアーマラート ③ジハード

イスラム法体系: イスラムを理念としてイスラム社会を秩序立てていた規範体系

①実定法としてのシャリーア(イスラム法)

②カーヌーン(行政法)

③ウルフ(慣習法)

## (2) 貨幣

### イスラム貨幣制度の成立

- 貨幣政策は国家の統治手段
- 統治の正統化の手段: 貨幣への統治者の名前の刻印
- イスラムの理念に基づく統一の証: 貨幣に刻まれたシャハーダ(信仰告白)をはじめとしたイスラムのメッセージ

#### イスラム貨幣史の時代区分

- (1) 模倣貨幣の時代(7世紀)
- (2) イスラム貨幣制度の時代(8-11世紀)
- (3) イスラム貨幣制度の揺らぎの時代(12-15世紀)
- (4) イスラム貨幣制度再編の時代(16-18世紀)

### (3) 都市

#### イスラム都市と「市場」

#### イスラム都市の中心・マディーナ(「市場」)

- マディーナは、迷路のごとく縦横に走る路地からなるが、商館や宗教施設を結ぶように走っている路地の両側には、せいぜい数平方メートルの広さしかもたず、商品を置き、店主が座ればそれだけで一杯になる小さな店舗がぎっしりと並んでいる。そこでは、香辛料、金銀細工品、絹・綿織物、布地、絨毯、石鹼など、遠隔地交易による商品や、地場で生産されるさまざまな手工業製品が売られている。また、そこはひとが集まる空間であるため、商業施設と宗教施設のあいだには、共同浴場、コーヒー店(カフワ)、共同給水泉などの公共施設が存在する。マディーナの上は、通常、昼間の強い日差しを遮るべく石や木でできた屋根で覆われ、アーケードを形成している。また、市場の内部には、各所に仕切り機能をもつ小さな門があり、日没とともに閉鎖される。

## イスラム都市の空間構成

- イスラム世界の都市空間の特徴のひとつは、職業空間と居住空間とが分離していたことであり、商人・職人は毎日、自宅から市場に通っていた。自宅のある居住区は、都市の城壁のなか、マディーナの周りに展開し、いくつかの街区（ハーラ、マハツラ）からなっていた。街区は、行き止まりの袋小路を共同空間とする都市住民の生活単位であった。夜になると、市場と同じく、仕切り機能をもつ小さな門が閉鎖された。イスラム世界の都市は、その景観と機能での、こうした密集性、迷路性、閉鎖性、境界性において、いちじるしい共通性をもっている。

## 2. イブン・ハルドゥーン(1332－1406年)の経済論 イブン・ハルドゥーンの文明論

- 文明。これは人間が互いに親しく交わることと、必要なものを充足することとのために、町や村で一緒に住まねばならないことを意味する。それはわれわれが説明するように、生計のためには互いに協力するという人間の本性から来るものである。その文明とは、辺鄙な地方や山地、すなわち荒地や砂漠の縁にあって、牧畜に適した小村で見られるような田舎の文明であるかもしれないし、大都市や市町村など、城壁による防衛を施されたところに見出される都会の文明であるかもしれない。しかし、このようにそれぞれ異なった状態にあっても、社会生活である限り本質的に起こるものが存在する。(『歴史序説』第一巻、86頁)
- 要するに、この社会的結合は人類にとって不可欠のものであり、これがなくては人類自身の存在も、人類を世界に住まわせて地上における神の代理者にさせようとする神の意志も、ともに果たされなくなるのである。このことこそ、この学問の対象として、われわれが設定した文明の意味である。(『歴史序説』第一巻、94頁)

## (4) イブン・ハルドゥーン(1332ー1406年)の経済論

cf.イブン・ハルドゥーンとアダム・スミス(1723-1790年)との間における類似性

- ①富と所得の源泉は労働である
- ②富と所得の規模は協業の度合いによる
- ③協業の度合いは人口規模と技術水準に基づく

⇒市場(金融・情報センター)としての都市

# 消費と流通の経済論

## 市場(金融・情報センター)としての都市

田舎や砂漠の文明は都会の文明に劣る。それは文明になくてもはならないものが、田舎や砂漠の住民のあいだではかならずしもなんでも揃っているというわけにはいかないからである。なるほど彼らはその土地で農業を営むことができるが、それに必要な材料、とくに技術に関するものを持っていない。・・・また田舎や砂漠の住民には、金貨や銀貨など貨幣がない。彼らは農産物とか家畜とか、あるいは牛乳や羊毛・駱毛・獣皮などの畜産物のような都市の住民が欲しがるものを代償として差し出し、これに対し都市の住民は金銀の貨幣を支払う。しかも彼らは生活の必需品のうえで、都市の住民[との交易]を必要とするのであるが、都市の住民はただ便益品とか奢侈品とかの点で彼らを必要とするにすぎない。こうして彼らはその生活形態上、本質的に都市に依存しなければならないわけで、これは彼らが田舎や砂漠に住む限り変らない。(第一巻 296頁)